

中国歴史班A

雲南における江西商人の活動
増田厚之(東海大学大学院文学研究科東洋史学専攻)

キーワード：会館、交易、江西商人
 調査期間・場所：2003年11月24日～12月23日 思茅、普洱、巍山
 2004年12月23日～2005年1月10日 紅河州

Report about "Huiguan" (Merchant Guild) stone inscriptions

MASUDA Atsushi(Master Student in the History Course at Tokai University)

Keywords: Merchant Guilds, Trade, Jiangxi Merchant
 Research Period and Site: 2003, November 24 - December 23, Simao, Pu'er, Weishan,
 2004, December 22-2005, January 10, Honghe Area

要旨：中国漢民族商人の活動に関する記述のある「重修萬壽宮碑記」及び商業活動の拠点となる会館に関する「重修石屏会館碑記」を紹介すると同時に、自分の研究テーマに絡めて、漢民族流入による商業の始まりが南方の開発にとってどういう意味を持っているのかを調べる。

1. はじめに

昨年度に引き続き、本年度は2004年12月23日～2005年1月10日にかけて、中国雲南地方の碑文調査を行った。[1] その調査の中、昨年度は雲南省思茅市において、雲南地方の商業活動において重要と思われる「重修萬壽宮碑記」[2]を、そして、本年度は昆明市において商業活動の拠点となる会館のあり方についての参考となる「重修石屏会館碑記」[3]を発見した。

まず前者であるが、「萬壽宮」とは、本来江西省に存在する許真君を祭った道観[4]を指すが、他の地方においては、江西省出身者によって造られた会館に付属する宗教施設及び会館[5]そのものを指す呼び名である。この石碑は乾隆十五年(1750)に建てられたものであるが、乾隆二年(1737)に建てられたものを建て直したという内容が書かれていた。つまり、中小規模の地域的商人であったはずの江西商人が、遠く思茅で会館を建てるにまで至っている。

後者は、昆明に建てられた石屏会館のものであるが、石碑自体は2004年に建てられた新しいものである。しかし、前半部分には会館設立に関わった人物が、そして会館利用者に関する記述が書かれており、会館の変遷を含めて萬壽宮にも当てはまる様々な情報を伝えている。この記述が文献資料によって裏付けされれば、非常に有用なものとなるだろう。

こういった石碑を積極的に利用する事によって、そして清代初期の決して安定しているとはいえない雲南における江西商人の活動実態とその交易路を明らかにすることによって、この時期の雲南商業の実態に新たな一考察を加え、さらに社会・環境に与えた影響についても、新たな切り口をもって再構成することができるのではないかと期待している。

2. 先行研究とそれに基づく今後の展望

これまでの江西商人に関する先行研究は、データとして貴重ではあるものの、雲南省における江西商人の活動内容についてはほとんど触れられていない。そこで、既出論文に記載されている雲南省にまつわる記述から情報を集めるとともに、そこでは利用されていない地方志を使ってさらなる情報を集めることが必要となる。特に、雲南省の特産物である茶を中心に据えて、当時の取引品目中の意義とその輸送経路を調べる。そして、雲南省に入ってくる取引商品から、交易の有無がどれほど一般の生活に影響を与えうるかを調べ、その重要性を確認する。

また、様々な雑誌及び地方志に掲載されている地図などを基にし、なおかつ地方志に記述された会館の分布状況から、できる限り詳細な交易路を明らかにする。現在では、『天下路程圖引』（楊正泰校注 山西人民出版社 1992.9）によって貴州から雲南に入る道を確認し、また、『徐霞客遊記』（徐弘祖著 上海古籍出版社 1980.11）別冊にある地図によって雲南北部のおおまかなルートが見えている。しかし『徐霞客遊記』本文の読解が十分ではないため、このルートは無条件に信用できるわけではない。

3. 碑文史料

1) 「重修萬壽宮碑記」の内容

この石碑は、思茅市文化館にあったものである。我々が文化館を訪れたときには横倒しの状態で置かれており、雨風にもさらされ続けていたことが窺えるような保存状況だった。高さ 2160 mm × 幅 990 mm と大きいものであるが、石碑自体は砂岩質の磨耗し易い石できている上に砥石として使っていたらしく、磨耗が激しく文字がかなり薄くなってしまっていた。もう一つ、裏面にも文字が彫ってあり、「萬壽宮碑記」（年代不詳）が存在していたが、こちらはさらに状態が悪く、読める文字はあってもきちんとした意味ある文章では見ることができなかった。特に下部の磨耗が激しく、ほとんど文字が見えない状態であった。

本文の内容を見ると、上述の通りに磨耗が激しく確認が困難であるが、少なくとも乾隆二年に建てられた萬壽宮を建て直したこと、そして、この再建に僧が関与しているということが読みとれるだけである。

僧の関与に関して言えば、雲南の僧である可能性が最も高いと思われるが、『天侖子全集』を見ると、江西省東郷県白城寺観音閣の修築のために白城寺の僧が雲南に赴き、三年かけて資金を募ったが、わずかに百両を得ただけに終わったという記述が存在する。[6] この記述のみから判断することは問題があると思うが、少なくとも雲南において江西省の僧が江西商人と関わる可能性が出たことは言える。したがって、この碑文に見える僧は、どちらかの出身の僧であると考えられる。しかし、江西省の僧が頻繁に雲南まで来ることは考えにくい。史料上に明確な記述は無いが、江西出身の僧に関しては、商人と行動を共にして会館に定住し、そこでの祭儀を担当するようになった者の存在を考慮すべきである。もうひとつの問題は、会館内で祭られている土地神などは、本来道教や民間信仰において扱われるべきものだという点である。萬壽宮は、おそらく江西省の道観、西山萬壽宮を意識したものであると思われるが、その場合、僧の関与は不自然という事になる。この問題に関しても、今のところはっきりした解答を持っておらず、今後の課題となる。

2) 「重修石屏会館碑記」の内容

前述の通り、石屏会館に関するこの碑文は極めて新しいものであるが、前半部分には見るべき点が多くある。

まず、昆明に初めて会館が建てられたのは乾隆年間だとされているが、正確な年代は不詳になっている。思茅に作られた江西会館が乾隆二年に造られたものであることを考えると、雲南省に持ち込まれた会館という概念は、積極的に登用する必要に迫られていることがうかがえる。その契機は立石、野本報告のとおりであり、そちらを参考にされたい。さらに、明代に移住した漢族によって省城昆明に造られた石屏会館よりも、遠く思茅に造られた萬壽宮のほうがおそらく新しいとするならば、北方から入ってきた漢族商人のうち、江西商人が最も早く雲南に入ったという従来の意見を補完するものであり、なおかつ、移住した漢族よりも、早く、積極的な活動を行っていると言える。

会館が昆明にあるせいか、利用者は農民・市民・商人・科挙を目指す学生で、規模は昆明のものが最も大きかった。五華山の麓、翠湖の畔に建てられており、碑文では「依山臨水而居，乃都市之「村庄」，開市之「桃源」也。」となっている。その様から、道光二十八年には雲貴総督林則徐が「三島淳風」の扁額を残した。

昆明以外の地域については、茶山のあるところに建てたという記述しかない。それぞれ思茅・蒙自・个旧・元江・普洱・他郎（現墨江県）・磨黒（現寧洱県）・丫口の地名が挙げられているが、民国に入ると十七箇所にまで増加している。後述するが、地方志における茶山に関する記述の変化から考えるに、清代に入って中国王朝地域でも取引品として人気を博し、需要が増したものと思われる。当初九箇所しかなかった石屏会館が最終的に一七箇所にまで増えた理由は、おそらく茶の生産があちこちで行なわれるようになったということであろう。それに伴って山を開き、田畑を茶畑に変えるということが行なわれたということがはっきりすれば、当時の自然環境に与えた大きな影響についても言及できる。

民国十年には、昆明に住む石屏商人・学生によって会館重修の提議がなされ、採用される。この時に建てられた二層三院の形式は、現在の石屏会館を見てもほぼそのままであるが、その規模に関して比べることは困難である。

4. 研究上の意味と碑文から見る今後の展望

「重修萬壽宮碑記」は、江西会館について書かれたものであるが、会館自体が本来雲南の少数民族の習慣にないため、北から流入してきた漢民族の手によって造られたものであることは明らかである。石碑に記述されている「乾隆二年（1737）」は、茶の栽培が発展し、商品化が激しくなる直前の時期であると言われている。つまり、江西商人は既にこの時期思茅に進出を果たしており、新たな市場として目を付け、市場開発を始めていると言える。

茶に関していえば、萬歴『雲南通志』巻四 地理では、車里軍民宣慰使司の物産には茶が含まれていない。一方、道光『普洱府志』巻八物産では、思茅庁周辺に存在していた六大茶山 [7] 及び「土人」の活動として茶の栽培が行なわれていることが挙げられており、商品作物の生産に関わるといった傾向は見ることができない。清代後期の地方志ではあくまで生産は現地の「土人」であり、さらに、重要な取引品目である茶であっても、その生産過程に関与していないという事実から、漢民族は、様々な軋轢を生みながらではあるが、生産者である「土人」との取引に終始していたと考えて良いだろう。[8] つまり、江西商人の交易相手とは、思茅に暮らす漢民族だけではなく、思茅周辺に暮らす少数民族をも含んでいたことが改めて確認できる。さらに、「重修石屏会館碑記」の記述から、この新たな商品作物の開拓によって、茶山が新たに開かれたことが窺える。これによって、雲南の経済状態や物資輸送のための道路の整備といった様々な生活環境の変化を招くことが予想され、今後は文献史料によるその裏付けも重要となる。

この漢族による交易・商業の開始が、南方開発、特に思茅においてどのような意味を持つことになるのかを、主要産物の一つである茶を通して確かめる予定である。さらに、中国の南端に近い思茅を基点とした、陸路による南方貿易についての可能性も探っていきたい。現在、「萬壽宮碑記」に関しては、調査で発見したものの他に『四川通志』の中に記述されているものを発見している。しっかりと内容を確認したわけではないが、この内容から思茅の「重脩萬壽宮碑記」の欠字部分を埋めるのではないかと期待している。もっとも、この二つの碑文のみでは、数が少なく資料としては不十分であるため、今後の調査を通して萬壽宮及びその他の会館に関する碑文を集め、その記述と地方志、雑誌等の記述を比較検討することによって、当時の雲南における商業実態に関して従来よりも一歩踏み込んだ考察、新たな切り口による商業史の構築、そして、新たな商業圏構築が現地に及ぼした社会・自然環境の変化に至るまでのさらなる言及が可能となるのではないかと期待している。

注

[1] 昨年度の調査に関する詳細については『総合地球環境学研究所 研究プロジェクト4-2 2003年度報告書』を参照。

[2] 2003年12月1日、雲南省思茅市思茅文化館にて調査。

[3]2005年1月7日、雲南省昆明市石屏会館にて調査。

[4]江西省南昌市逍遙山西山萬壽宮。許真君を祭る。許真君は、名を許遜、字は敬之、旌陽令であったことから旌陽先生とも言う。道教の一派である浄明道の開祖で、江西十二真君の一人に挙げられている。詳細は『逍遙山萬壽宮志』を参照。

[5]江西省のみならずその他地域の会館も含めて、そこに付属している宗教施設とは、それぞれの出身地で行なわれている宗教行事を行なうための施設であり、現世利益を祈るだけでなく、郷土の宗教儀式をもって会館を利用する同郷者たちを結束させる役割を持っていた。会館については、呉慧「会館、公所、行会：清代商人組織演變述要」『中国經濟史研究』一九九九年第三期、及び藍勇「清代西南的移民会館」(『西南歴史文化地理』付録一)西南師範大学出版社 一九九七年三月を参照。

この「重脩萬壽宮碑記」に関しては、思茅文化館職員からも江西商人による会館であることを確認している。また、『雲南省地誌』第四卷 思茅縣地誌(雲南學會民国十年(1921)八月)全境略圖の中には、思茅縣城街市圖が掲載されており、城市内に江西会館の場所が明記されている。石屏会館についても、県城内にあることが明記されている。

[6]艾南英『天侖子全集』卷九 白城寺僧之滇黔募建觀音閣疏

[7]道光『普洱府志』卷八物産を参照。六大茶山として倚邦・易武・莽芝・漫撒・攸楽・平川が挙げられている。ちなみに、質がよく高級品とされているもの順に並べてある。

[8]ここでのいう軋轢に関しては、クリスチャン・ダニエルス「雍正七年清朝によるシブソンパンナー王国の直轄地化について—タイ系民族王国を揺るがす山地民に関する一考察—」(『東洋史研究』第六十二卷第四号)参照。清朝が雍正末年まで導入していた、茶貿易の専売制度に対するチベット・ビルマ系民族の不満や、文武官が私的に行なっていた茶貿易に伴う現地民への弊害等について、詳細な論証がある。

Synopsis: This report describes the “Chongxiu Wanshou Gong Beiji” stone inscriptions which record the activities of Han Chinese merchants, and “Chongxiu Shipin Gong Beiji” stone inscriptions which record the “Huiguan” which is the base of the commercial operation. It considers the significance of these inscriptions for the history of Han Chinese style commerce in developing Yunnan.